母性社会日本における道徳性の発達
——青年後期をめぐって（前篇）

杉　本　裕　司

序

我々は先立つ論考[1]において、日本人の道徳性の発達の仕方とその可能性を、認知発達論（L.コールバーグ〔及びC.ギリガン〕）と深層心理学（主としてユング派）との「対話」によって検討することを試みたが、本論文は言わばその続篇として、青年後期（late adolescence）[2]に考察の焦点を絞って、その今日的問題性を明確化することを目的としている。

かつてR.J.ハヴィガーストは、青年期の発達課題のうちに「社会的に責任のある行動を求め、そしてそれをなしとげること」及び「行動の指針としての価値や倫理の体系を学ぶこと」を含み入れたが[3]、前世紀の末からこの方、このような課題の達成は、少なくともわが国では極めて困難な様相を呈している。そしてこの困難さは、青年後期に特有の普遍的な問題——その限りでは今日に限定されたものではない——、先進国の青年が共通して抱える問題——モラトリアムが延長された状況においてK.ケニストンは、かつて「青年期」と「成人期」の中間に「若者期（youth）」を想定し、社会への「異議申し立て」の段階としたが[4]、今日ではそのような事情は大きく変貌してしまった——、そして青年をめぐる、「母性社会」として特徴づけられるわが国独自の問題、という3つの次元の複雑な織り合わせに発している。我々に課せられるのは、この絡み合った糸を丹念に解いてみせることである。そしてそこに露呈してくるもの次第では、青年後期の、人生全体における位置づけ（特に道徳性の発達に関して）、ひいては「発達」という考え方自体に対する見方の大きな変更を余儀なくされると思われる。

以下では、まず主としてコールバーグやE.H.エリクソンに従って青年後期と

道徳性の発達との関連、とりわけこの時期に見られる「懐疑的相対主義」そしてそれに対応する、アイデンティティの「拡散」や「モラトリアム」について、今日的事情を考慮しつつ整理し（前篇）、そして現代日本の青年の道徳性と深層心理を闡明しつつ、青年期に対するユング派の知見を参照しながら、今後の方途と可能性を探索することとしたい（後篇）。

1.

コールバーグの初期の調査において、第4段階（慣習的水準）から第5段階（脱慣習的水準）への発達に際して、前慣習的第2段階（道具主義的・相対主義的な道徳性の志向）への「退行」が生じることが発見された。即ちこの立場に立つ者は、道徳判断に関して「文化的相対主義」のみならず「倫理的相対主義」（＝道徳原理は社会〔ひと〕によって相対的〔恣意的〕であると共に、そのような多元性を一致にもたらす合理的な原理・方法はなく、普遍的に受容されうる規準もない）を唱えると同時に、道徳的推論は、当事者の欲求や利益を拠り所にしたものだ、と主張する。このような特徴からコールバーグは、この立場をかつては「ラスコーリニコフ症候群」と呼んだが、しかしながらこの現象は、その後の評定法の改訂に従って、「退行」ではなく、脱慣習的段階への移行に際しての一時的「過渡的」現象と判断され、4½段階として規定された。[5] 簡潔に言えば、所謂青年期における自我同一性の危機によって、一時的な倫理的懐疑主義（相対主義）に陥ることからこの現象が生起するのであり、己れが所属している（準拠していた）既成集団の権威への信頼がぐらつき、その価値観の共有からの離反が生じ、それに従った行為遂行ができなくなる反面、未だ新しい自律性の原理（脱慣習的道徳）に従った行為遂行もできないことから、この懐疑的心理状態に陥ると考えられたのである。いずれにせよ、この過渡的段階は、道徳的推論の新たな様式を呈示しているものではない以上、それ自体は決して正式な道徳段階とは認定されえないが、他方で、この段階にある者は、極めて抽象的でメタ倫理学的な主張を高水準の仮説的態度において展開できるが故に、前慣習的水準への単なる退行でもないのである。

前論文において我々は、このような懐疑的相対主義に対して（そしてすべて

の倫理的相対主義をそれと共に一蹴するコールバーグに対して）オールタナティヴなものとして唱導されたギリガンの「文脈的相対主義」を（日本的状況倫理との絡みで）検討した[6]が、ここでは、この青年期の懐疑主義の在り方とその成立機序を考察してみたい。

J.ハーバーマスは、コールバーグがこの懐疑的相対主義を、未だ克服されざる一時的な青年期危機の表われとして心理力動的な説明対象とのみしたことを不充分だと論難し、その安定した永続化の可能性を指摘しつつ、それが具現化された哲学的立場——即ちM.ヴェーバーからK.R.ポパーへと続く、理性への決断の立場、合理主義の間主観的拘束性を否定する立場——を挙示する[7]。そしてコールバーグは、彼の道徳性の発達段階論が（普遍妥当的として）前提する哲学をまさに真っ向から否定する哲学的立場が、十分な構造的位置づけをもたぬまま、当の、規範倫理に根差した発達段階論の内に現れるというパラドクシカルな事態——ハーバーマスと共に言えば「移行段階という、この理論に都合の悪い現象」[8]——を招来しつつ未解決のままにしているのである。いずれにせよハーバーマスから見て重要なのは、議論の土俵を道徳心理学的—心理力動的問題設定から哲学的なそれへと移すことである。

我々は哲学的—メタ倫理学的に尖鋭化された次元に議論を持ち込もうというハーバーマスの主張を正当なものと認めつつも、なお懐疑的相対主義的移行段階（及びその「永続化」された在り方）の成立プロセスを発達心理学的—深層心理学的に明確化することをここでの課題としたい。従って問われるのは、コールバーグの理論枠組自体ではないし、いずれの哲学的立場——つまりは「倫理的普遍主義」対「倫理的相対主義」——がより「正当」かの問いもエポケーされる。コールバーグが青年後期に出来するものとして剔出した事態そのものが検討されるのであり、そしてこのことはコールバーグが、このような倫理的懐疑主義は、短期的な「移行段階」にとどまることなく、時には——哲学的立場ではなく——ニヒリスティックなイデオロギー（ナチズムやスターリニズム）として安定した志向となりうる虞れがある、と主張する[9]が故に重要な課題となる。

2.

決してすべての青年ではないにせよ、とりわけ大学に進学した青年の多くは、己れの生活環境の変化という外的要因と、形式的操作的思考に基づく認知的側面の発達という内的要因とから、その（A.アドラー的意味での——ただしより柔軟かつ可変的なものとしての）「ライフスタイル」[10]の大きな変更・再方向づけを余儀なくされる。道徳性の次元で言えば、慣習的道徳を体現している、実体的人倫としての家族との一次的絆から彼（女）は離脱すると同時に、さまざまな価値観に根差した諸集団——中心となるのは同輩集団であろうが——に所属しつつ多元的な価値観の存在を知ると共に、それまでの自分の価値観を打破しうるような圧力をもった現実に対処せざるをえなくなる。このことは一方では、さまざまな役割遂行を通して、それまでとは異なった道徳的基準を投企する実験（少なくとも思考実験）の機会が与えられることを意味するが、他方では、持ち前の道徳判断では対処し切れぬ事態に直面して、己れの道徳的基準が混乱し、さらには解体する危機に直面しうることも意味する。しかしいずれにせよ、これらの体験を通して青年は、己れがそれに従って自らを形成させた慣習的道徳に対し、仮説的態度によって距離をおき、それ自体として反省的に対象化できるようになる。今や彼(女)は慣習的世界の外に自らの視座を設定するのであり、こうして妥当性を有していた慣習的道徳はメタ倫理学的態度の下に相対化される。

コールバーグは、脱慣習的—原理的段階への発達的移行を促す契機として、第1に、大学におけるモラトリアムの経験を、そして第2に、他者の幸福に対する持続的な責任と非可逆的な道徳的選択の経験を挙示する[11]。第1の経験に関して言えば、青年後期におけるモラトリアムや自我同一性の危機は、彼(女)を相対主義に直面させるが、それは脱慣習的水準への発達を促進するポジティヴな要因として捉えられるということ、そして第2の経験は、職務などにおいて道徳的責任を負うこと（道徳的役割取得）を通じて獲得され、（それ故、それが未だ欠如している青年期においては、脱慣習的水準への移行は生じない）、それはエリクソンによる自我の漸成的発達図式の第7段階における「世代性

〔生殖性〕(generativity)」の中心になるもの——従って（青年期のイデオロギー志向に対して）成人期の倫理志向の中心になるもの——である。

このようなコールバーグの主張の背後に遡行すれば、それが自明の前提としている事柄を指摘することができよう。即ち——（彼の倫理的普遍主義からして）倫理的相対主義は（成長に伴って）克服されうるし、されるべきである、という前提は当然として——第1に、彼はエリクソンの漸成的発達図式を普遍妥当的なものとして受容しており、アイデンティティの確立（拡散）が世代性（停滞）より発達的に先立つ、と考えていること。そして第2の前提として、モラトリアム的相対主義の時期が過ぎれば、それを促進要因として成人期に職業（子育ても含めて）につき、道徳的責任をもつようになる（少なくとも、そうなりうるし、なるべきだ）ということ、別言すれば、彼の挙示した2つの契機は「両立」すると考えていること、である。

しかしこの2つの前提は、果たして自明視できるだろうか。まず第1の前提に関して言えば、青年期が成人期に先立つのは当然だとしても、エリクソンの、この発達課題（危機）の順序が文化的—歴史的に通汎的である、と言い切れるだろうか。そして第2の前提に関して言うと、コールバーグは、相対主義的道徳判断から脱慣習的道徳判断への移行をしない者の存在を認め、それに対して、そのような者はまだ発達途上にいるのであって、将来的には第5段階へ移行することが縦断的研究によって明らかになるだろう、という（楽観的万至ポジティヴな）見通しを述べている[12]。しかしながらこの見通しは直ちに首肯されうるだろうか。山岸は、コールバーグの言う第2の契機、つまり「他者の幸福に対する持続的な責任と非可逆的な道徳的選択」によっては、普遍化可能性という基準における最高位の思考形態である脱慣習的—原則的水準は達せられるようなものではない——何故ならこの水準に立つ者は、個別的具体的状況に主体的に関わらなくて済むから——と批判している[13]が、問題はもう一歩手前にあるのではなかろうか。つまり具体的状況に主体的に関わらなくて済む（というか場合によってはそれができない）モラトリアム的青年期の在り方（つまりコールバーグの言う第1の契機）が第2の契機の経験を不可能にしてしまうことはないのだろうか。

我々がここで想起すべきことは、エリクソンの漸成図式においては、第5段階（アイデンティティの確立vs拡散）と第7段階（世代性vs停滞）の間に、初期成人期に位置する第6段階（親密さvs孤立）が想定されていることであり、そしてその際問われることは、この「親密さ」という発達課題は、（少なくともコールバーグが理解する限りにおいては自律的主体的自己を目指しているはずの）エリクソンの発達段階論には何処かそぐわないものがないだろうか、ということである。青年後期に懐疑的相対主義に直面し、さらに——ギリガン的に言えば——自己を他者との繋がり、ネットワークの下に、つまりは親密性の下に理解しえない者[14]は、孤立主観的位置に己れを設定し、従って又、他者をもそのような孤立主観として把捉し、道徳問題に関してはエゴイスト的相対主義者となりうると考えられ（それに対するオールタナティヴな可能性としては、懐疑主義的相対主義が、親密さの成就により「成熟した相対主義」[15]へと変貌することも考えられる）、そのときには、他者の幸福に対する責任意識も、それに根差した行為も生じてはこないだろう。だが自律的主体的自己に基づくコールバーグの公正道徳の発達段階論では、この（エリクソンの、自我の機能的段階論における）親密さの位置づけが明らかでないのである[16]。

いずれにせよ、このことも含めて青年後期の相対主義の問題を発達心理学的に考究するためには、我々はさらにエリクソンを中心にした自我同一性（以下「アイデンティティ」と呼ぶ）論に向かわねばならない。

3.

ここでの目的は、エリクソン（ら）のアイデンティティ論をその全体において検討することではなく、青年期の倫理的相対主義の文脈において、それとの関連が深いアイデンティティの「拡散」[17]と「（古典的）モラトリアム」の問題圏のみを闡明することである。

青年期に達成されるべきアイデンティティの感覚とは、乳幼児期以来の自分と、青年期になって新たに見出されていく自分との統合が成し遂げられ、その一貫した連続性の維持と他者による承認及びその世界への帰属感が獲得されるところに存する感覚である。そしてその達成のためには、それまでの依存対象

である親（慣習的世界）からの分離と、社会での新たな役割取得が必要とされるが、それにとって中心的かつ媒介的な機能を果たすのは、道徳的—価値的次元の心理力動的な修正と発達の経験である。即ちハーバーマスが言うように「道徳発達は、アイデンティティにとって決定的なパーソナリティーの発達の一部を表わしている」[18]のである。

ひとは幼児期以来、さまざまな他者との心理—社会的諸同一化を通して、とりわけエディプス期における超自我形成を通して、社会的価値を取り入れ、内面化する。道徳性のパースペクティヴから青年期におけるアイデンティティの形成を捉えるなら、それは、成人期への移行へ向けて成熟していく自我が、それらの内面化され同一化された価値をいったん相対化し、再構成・再統合していくプロセスである。つまり「アイデンティティの形成は、結局、同一化の有用性が終わるところで始まる」[19]わけである。そしてその際には、第1に、両親に象徴される慣習的価値の権威からの背馳・逸脱がもたらす罪悪感と不安が克服されねばならず[20]、第2に、新たに提示された諸価値——そのように青年によって新たに希求される価値体系が（それまでの超自我「道徳」に対比される）「イデオロギー」であるが[21]——から己れ自身の価値として自発的に選択しつつ統合し、それに基づいて己れの責任において行為することができるようにならねばならない。

しかしながら、社会構造の複雑化と相俟った、多様で、しばしば矛盾—対立し合う価値体系の提示は、青年をして一種の「危機」に直面せしめる。エリクソン的に言えば、危機とは「前進か退行か、統合か遅滞かを決定する瞬間、ターニング・ポイント」[22]であり、心理—社会的な発達は、この危機的段階の解決によって可能となる。彼(女)は自らの力のみを頼りとして、対象関係や適応様式においてそれまで安定してつかまっていた空中ブランコの握り棒を離し、成人に至る新たな握り棒に飛び移る危険を冒さねばならない[23]。このようなことは一定の強度を有した自我の統合機能を必要とするが、それだけでなく一定の時間をも必要とする。こうしてアイデンティティの模索の保証期間としての「モラトリアム」が設定されることとなる。その位相は[24]、まず現実から離脱し（社会の相対化、社会からの距離化[25]）、次に現実を批判的に再構成し（社会と自己と

の新しい関わり方の模索)、そして遂に現実に復帰する（社会への新しい関与)、というプロセスを辿る。

このようなモラトリアムの期間を経て、青年はアイデンティティを確立するとされるが、しかしながら上述したような一定の強度の自我を形成していない青年の場合、諸価値体系の葛藤に晒され、急性の拡散症状——所謂「自我同一性拡散症候群」——に陥りうる。それは今日のボーダーラインに似た[26]病理的退行であり、エリクソンによれば、肉体的な親密さ・職業の決定・激しい競争・心理—社会的な自己定義などを要求される場面で、責任をもって選択し、それに自分を賭ける事態において顕在化する[27]。それによって彼らの人生観や価値観は混乱し、見失われてしまうのである。

だが1960年代から70年代にかけての、青年に対する社会の対応を中心にした急激な歴史的—社会的変動と共に、アイデンティティの拡散は急性で一過的な臨床像に見られる青年の危機的在り方から、青年一般のメンタリティーへと拡大化・汎化された[28]。それにより「ノーマル」な事態としての「青年期危機」が追認され、「遷延された青春期」(P.ブロス）としてあえて拡散状態にとどまろうとする傾向が生じることとなった。そしてそれと平行してモラトリアムの内容も変質を見せ、自立しアイデンティティの確立した成人期へと身構えつつ自己探求の苦しみの只中にいる（上述のような)「古典的」モラトリアムから、価値の普遍妥当性を信じることなく、そこから特定のイデオロギーへの、さらには現実へのコミットメントの回避という帰結を導出し、たしかな自己規定と責任を持たぬまま、いつまでも未決定の状況に遊ぶ新しいモラトリアム＝「モラトリアム人間」(小此木）へと青年のライフスタイルは変化した[29]。このことは見方によれば、「拡散」と「モラトリアム」が近い様態を呈示するようになったことを意味していると言える。例えば、（後述する）J.E.マーシャのアイデンティティ・ステータス面接の評定において、「モラトリアム型」と「拡散型」の区別が難しくなったこと[30]、あるいは又、「拡散型」の状態像・行動像が広い範囲に汎るようになり[31]、言わば拡散概念の拡散が生じたこと、にこのことが表われている。

4.

さて以上のようにエリクソンの、とりわけアイデンティティの拡散とモラトリアムに関する主張を瞥見してみたが、青年のメンタリティーと彼らを取り巻く社会状況の変化に基づいたエリクソン後の調査研究によって、彼の主張に対する一定の距離化と反省的相対化が今日生じている。それはとりわけアイデンティティの確立（あるいは自己理解）の仕方の文化差の次元と、（フェミニズムや女性の生涯発達研究に発する[32]）発達の在り方の性差の次元においてである。例えば無藤は、アイデンティティ研究上で広く共有されてきた価値観は、精神的に自立していくというプロセスを発達と考えるものであり、その途上で何らかの葛藤に晒される時期を体験した方がよい、という見方に立ちつつ、そのような「葛藤や探求をする（できる）自分が青年期にすでに存在している」ということを前提にしているが、しかしこのような捉え方は今日の実情にもはや合致しないかもしれず、又、自立中心の考え方は、女性は自己確立に男性より遅れをとっていると判断されることになる、と主張している[33]。

このような、アイデンティティ研究上の不十分さの指摘あるいはパラダイム・シフトの要求は、当然のことながらその研究の中核を担ってきた人々も真摯に受けとめざるをえないものである[34]。マーシャは、アイデンティティ研究における（探求されるべき）新たな方向は、第1に女性のアイデンティティ形成に関する問題群であり、第2に認知発達、道徳的推論及びアイデンティティの間の関係の性質の明確化である、と述べている[35]。ここでは彼が考案したアイデンティティ・ステータス[36]に関連してのみこの2つのことに言及することとする。

マーシャのアイデンティティ・ステータス論について留意すべきことは、青年期における4つのアイデンティティ・ステータスを決して固定したタイプとしてではなく、それ以降の発達も視野に入れた動的なプロセスとして把握すべきだということ、そして又、たしかにステータスに関して高いもの（達成型とモラトリアム型）と低いもの（フォークロージャー型[37]と拡散型）が存するものの、それぞれのステータスは皆、発達に関してポジティヴ（適応的）な面とネガティヴ（病理的）な面を有しているということである。だがこの第2の点に

おいて男性と女性では異なった様相を呈するのであり（従って自づから第1の点に関しても異なったプロセスを辿ると考えられる）、例えばアイデンティティの達成は男女共にポジティヴな帰結をもたらすのに対し、モラトリアムとフォークロージャーは男女で相違している[38]。即ち、女性のモラトリアムは男性のそれより不安定でリスク度が高い一方で、女性のフォークロージャーは男性のそれより勤勉度が高く、男性ほど問題を生じさせないのである[39]。それ故マーシャ自身が、ステータスのグルーピングを男女によって異なったものとした。つまり男性は（上述したように）「達成型とモラトリアム型」対「フォークロージャー型と拡散型」であるのに対し、女性は「達成型とフォークロージャー型」対「モラトリアム型と拡散型」にグループ分けされる。そしてこの相違の要因は、青年男子は「年を追うごとにアイデンティティ達成に接近すること」を求めているのに対し、青年女子が求めているのは「安定性」であることに存する、と言う[40]。さらに又彼は、女性のアイデンティティ・ステータスを測定するためには、第1に、アイデンティティの達成程度を把握するための心理—社会的基準である「危機とコミットメント」が関わる領域を——男性の「職業と（宗教的及び政治的な）イデオロギー」に対して——「関係性の確立と維持」に設定すべきであり、第2にアイデンティティの形成プロセスが男性より長くかかるので、回顧的（retrospective）な手法を取るのがよい、と示唆している[41]。

次に、アイデンティティ・ステータスと道徳性との関係については、S.ミルグラムの所謂「アイヒマン実験」と類似した方法で調査した、M.ポッドによる古典的研究[42]が嚆矢であり、その後の諸研究も大体ポッドの結果を追認している[43]。彼によれば、道徳的推論の成熟度はアイデンティティの発達に随伴しており、そのステータスにおいて高い個人（達成型とモラトリアム型）は、道徳的推論の脱慣習的水準で判断し行動する傾向があるが、より低い主体（フォークロージャー型と拡散型[44]）は前慣習的及び慣習的水準にあるのである[45]。（また、我々の問題関心との関連で言えば、J.クローガーが、モラトリアム型の青年は、その人間関係において〔他のステータスに比して〕もっとも前—親密的な傾向があり、そして又、拡散型の青年は、一般的に、自我発達、道徳的推論、複雑な認知などに関し、低いレベルにあり、社会的相互行為における協力の能力の

貧困さを示している、と述べている[46]ことが留意されるべきである。）このような諸研究をうけてマーシャは、形式的操作が、脱慣習的な道徳的推論とアイデンティティ達成の両方にとっての（十分条件ではないが）必要条件であり、その両方の発達を促すこと、そして又、アイデンティティと道徳的推論は、相互的に高める形で一緒に結びつけられていること（別言すれば、どちらか一方が他方を一方的に規定しているのではないこと）を主張している[47]。

さて、このようなアイデンティティと道徳性の発達との関連について一言述べるならば、この関連が性差のレベルで把えられていないことであろう。（例えばポッドの研究は、その被験者が男性に限定されている[48]。）だが、第1の問題群から男性と女性ではアイデンティティの捉え方が異なることが導出されるなら、それは必然的に第2の問題群にも影響を与えずにはおかないはずである。つまり、アイデンティティ形成の性差の問題と道徳性の発達の仕方の問題はクロスさせて検討されねばならない。そしてこのことは、深層レベルにおいて「母性社会」であるわが国における、青年後期のアイデンティティと道徳性の在り方とそれらの連関を探索する際には、重要な示唆を与えてくれるものとなろう。だがこの問題は取りあえずはここで措き、以上のような前提作業を踏まえた上で、いよいよ現代におけるわが国の青年の生き方の具体的検討に入らねばならない。

（つづく）

註

（1）拙稿「母性社会日本における道徳性の発達――認知発達論と深層心理学との「対話」の試み」（熊本大学文学会『文学部論叢』第54号　1997年）　同「母性社会日本における道徳性の発達（承前）――認知発達論と深層心理学との「対話」の試み」（同論叢第62号　1999年）

（2）青年後期とは、大学生の年代に相当し、「急激な身体成熟、第二次性徴、性衝動の昂まり等の生物・身体的変化への対応を主な課題とする思春期（青年期前・中期）が一段落し、心理；社会的課題が主題となる17，8歳頃から職業決定や配偶者の決定など人生についてのかなり永続的な選択を行なうための準備が整い、成人期への移行が可能となる22，3歳頃までの期間」を指す。下山晴彦「青年期後期と若い成人期　男性を中心に」（小川捷之・齋藤久美子・鑓幹八郎編『臨床心理学大系第3巻　ライフサイクル』　金子書房　1990年）pp.146～147

（3）R.J.ハヴィガースト『人間の発達課題と教育』（荘司雅子監訳　玉川大学出版部　1995年）p.153ff.及びp.157ff.

（4）K.ケニストン『ヤング・ラディカルズ』（庄司興吉・庄司洋子訳　みすず書房　1973年）p.259ff.ただしこの訳書では若者期（youth）に「青年期」という訳語を充てている。

（5）さらに1980年代になると、J.フィシュキンの批判に対応しつつ、この規定自体も修正された。もっとも、青年期にこのような相対主義が生じるという事態に変わりはないが。cf.L.Kohlberg,Essays on Moral Development.Volume Ⅱ.The Psychology of Moral Development（以下KohlbergⅡと略す）（San Francisco 1984）p.440

（6）前掲拙稿、特に第8節以降参照。

（7）J.Habermas,Moral bewußtsein und kommunikatives Handeln（Frankfurt / Main 1983）S.196

（8）Habermas,a.a.O.S.197

（9）コールバーグ「『である』から『べきである』へ」（永野重史編『道徳性の発達と教育』　新曜社　1985年）p.79

(10)アドラーの言う「ライフスタイル」については、例えばA.アドラー『個人心理学講義』（岸見一郎訳　一光社　1996年）第4章を参照。

(11)KohlbergⅡ, p.492

(12)op.cit.p.464

(13)山岸明子「おとなになるということ――Kohlberg理論とErikson理論をめぐって――」（「心理学評論」　1983　vol.26）p.278ただし原則的水準に対するこのような山岸の理解が正鵠を得ているかどうかは別問題である。

(14)もちろんエリクソンの漸成説の主旨からして、「親密さ」は何も初期成人期において初めて形成されるわけではなく、それ以前にも萌芽的に養われている（べき）である。

(15)ここでは文脈的相対主義を想定してよいだろう。山岸前掲論文p.284参照。

(16)コールバーグの道徳発達論とエリクソンの自我発達論との関係については拙稿でも述べたが（前掲拙稿第4節）、より詳しくは梁　貞模「青年期以降における道徳性発達」（佐野安仁・吉田謙二編『コールバーグ理論の基底』世界思想社　1993年第3部第3章）p.266ff.参照。また山岸は前掲論文において、コールバーグがエリクソンを正しく把握していないと批判している（p.278f.）が、このことについては後で考えることとしたい。

(17)周知のようにエリクソンは、「拡散（diffusion）」を1968年以降「混乱（confusion）」と呼び改めるようになったが、ここでは便宜上「拡散」で通すこととする。

(18)Habermas,Zur Rekonstruktion des Historischen Materialismus（Frankfurt / Main 1976）S.74

(19)E.H.Erikson,Identity Youth and Crisis（New York　1968）p.159

(20)「イデオロギーへの急激な傾倒」が「時として同一性拡散ないしは同一性葛藤に対する防衛的な鎧として無意識的に用いられることも多い」（山本　力「アイデンティティ理論との対話」〔鈴幹八郎・山本　力・宮下一博共編『アイデンティティ研究の展望Ⅰ』ナカニシヤ出版　1984年　第1章〕p.24）ように、逆に又、洗練された水準での道具主義的相対主義を、この超自我に由来する不安に対する「知性化」による防衛として捉えることもできよう。なお乾は、青年後期において、発達的方向へ進むことによる親からの自立が対象喪失感と罪悪感を生むと同時に、だからと言っ

て親の元にとどまること（後退すること）は恥の意識を生むのであって、この両者のジレンマを理解せねばならない、と指摘している。（乾　吉佑「青春期後期の精神療法」〔小此木啓吾・岩崎徹也・橋本雅雄・皆川邦直編『精神分析セミナーV　発達とライフサイクルの観点』岩崎学術出版社　1985年所収〕p.210ff.）これは、とりわけ日本的な罪と恥の問題を、青年期の発達の問題と絡めて考える上で示唆的な洞察である。家族から同輩集団への準拠集団（所属集団）の移行と重ね合わせてみると、社会心理学的な、罪と恥に対する考察とも近いものがあろう。例えば、井上忠司『「世間体」の構造』（日本放送出版協会　1977年）特にp.127ff.参照。

(21)Erikson, The Life Cycle Completed (New York 1982) p.92ff.この青年期イデオロギーが如何にして成人期「倫理」へと移行していくかが、エリクソンにおける道徳性の発達論の根幹である。

(22)Erikson,Childhood and Society (New York 1993〔1950〕) p.270f.

(23)cf. Erikson,Insight and Responsibility (New York 1964) p.90　それまで（幼児・児童期）の自分が一度「死んで」新たな自分へと統合され再生する、という意味において、それはユング心理学的に言えば「死と再生」の体験である。Cf.Erikson,Identity and the Life Cycle (New York 1994〔1959〕) p.125 and p.183（n.5）また（後述する）「アイデンティティ・ステータス」による経験的調査においても、「死の不安」が青年後期のモラトリアム的主体において他の3つのステータス（即ち「達成型」「フォークロージャー型」「拡散型」）よりも有意に高いことが見出されてきた。cf.J.Kroger,On the Nature of structural Transition in the Identity Formation Process,in:J.Kroger(ed.)Discussions on Ego Identity (New Jersey 1993) p.216

(24)小谷　敏編『若者論を読む』（世界思想社　1993年）p.49参照。

(25)この点で、内藤が言うように、かつてコールバーグによって4½段階とされた青年は、このモラトリアム期間の在り方と似ていて重なる部分がある。内藤俊史「道徳性と相互行為の発達」（藤原保信・三島憲一・木前利秋編『ハーバーマスと現代』新評論　1987年　所収）p.200参照。

(26)「同一性拡散症候群」と「境界例」との関係については、例えば鈴幹八郎・山下格編『アイデンティティ』（日本評論社　1999年）p.163f.参照。

(27)Erikson,Identity and the Life Cycle.op.cit.p.133

(28)山本は、この一般化・拡大化の下地が、エリクソン理論（広くは精神分析理論）の性格自体に内在しているものだと指摘しつつ、にもかかわらず、「境界性人格障害」のような早期幼児期に起源をもつ病理像を心理—社会的文脈でのアイデンティティ拡散から区別した方が臨床的に有効である、と主張する。（山本　力、前掲書p.29及びp.34）また藤山も——J.マスターソンに準拠してであろうが——軽い抑うつや不安といった症状を呈する正常範囲内にある青年と、成人後の人格障害や精神障害に繋がるような重篤な諸症状をもつ青年とは統計的にも区別されうるのであって、正常な青年期自体を一過性の危機として捉える「青年期危機」という臨床単位自体が意義を失ないつつある、と指摘している。藤山直樹「思春期・青年期精神医学」（小此木啓吾・深津千賀子・大野　裕編『精神医学ハンドブック』　創元社　1998年所収）p.334参照。

(29)古典的なモラトリアムと新しいそれとの間の比較については、例えば小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』（中公文庫　1981年）p.27ff.参照。

(30)これについては、無藤清子「青年期とアイデンティティ」（鈴幹八郎・山下　格編『アイデンティティ』前掲書所収）p.53参照。

(31)これについては、鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子「外国文献の時代的推移と研究の方法論的検討」（鑪幹八郎・山本　力・宮下一博編『アイデンティティ研究の展望Ⅰ』前掲書　第Ⅲ章）p.79参照。
(32)例えば、岡本祐子編『女性の生涯発達とアイデンティティ』（北大路書房　1999年）に収められた諸論考を参照のこと。
(33)無藤清子、前掲書p.49ff.参照。
(34)今日におけるアイデンティティ研究の概説としては、J.Kroger,Ego Identity:An Overview in:J.Kroger(ed.)op.cit.p.1ff.
(35)J.E.Marcia,Identity in Adolescence,in:J.Adelson(ed.)Handbook of adolescent Psychology（New York 1980）p.178
(36)アイデンティティ・ステータスに関しては、Marcia,Identity in Adolescence,op.cit.esp.p.161（Table 1）また邦語による解説としては、例えば鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子による前掲論文p.68ff.及び鈴木康平・松田惺編『現代青年心理学』（有斐閣　1997年）p.63ff.参照。なおアイデンティティ・ステータス理論への批判的見解の展開としては、例えば大野　久「青年期の自己意識と生き方」（講座生涯発達心理学4『自己への問い直し』金子書房　1995年　第4章）p.102ff.参照。
(37)「フォークロージャー（foreclosure）」に対しては、「早期完了」「早期閉鎖」「早産」「予定アイデンティティ」など、さまざまな訳語が充てられているが、本論文では原語のニュアンスを生かすためにそのまま「フォークロージャー」と表記することとする。
(38)B.M.ニューマン／Ph.R.ニューマン『新版　生涯発達心理学』（福富　護訳　川島書店　1988年）p.336f.参照。
(39)齋藤久美子「青年期後期と若い成人期　女性を中心に」（小川捷之・齋藤久美子・鑪幹八郎編『臨床心理学大系第3巻　ライフサイクル』前掲書）p.169参照。
(40)Marcia,Identity in Adolescence,op.cit.p.174
(41)p.179
(42)M.H.Podd,Ego Identity status and Morality:The relationship between two developmental constructs.in:Developmental Psychology, 6（1972）
(43)これについては、岡本祐子「外国（ことに米国）におけるアイデンティティ研究の展望」（鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子共編『アイデンティティ研究の展望Ⅱ』ナカニシヤ出版　1995年　第Ⅲ章3節）p.70参照。またわが国では、山岸がアイデンティティ・ステータスと道徳判断の水準との関連について述べており（山岸前掲論文p.279ff.〔とくにp.280の表3〕参照）、そこでは拡散型に関し、古典的拡散型と能動的拡散型が区別されていること、及びアイデンティティ達成型が文脈的相対主義と等置されていること、が本論文の後の議論との関係では重要である。
(44)さらに、フォークロージャー型は権威主義との関係が深いこと、そして拡散型は決して一枚岩ではなく、「コミットしないことにコミットする」という洗練された哲学をもつ者もいることが示されている。(Podd,op.cit.p.505)
(45)R.デーベルト＆G.ヌンナー＝ヴィンクラーと共に言えば、このことは次のように定式化できる、即ち「青年期危機の異なった経過の形が道徳意識の構造を決定し、今度はまたこの道徳意識が、人生の目標の、及び行為に関わる価値方向づけの選択を導く。」（R.Döbert u. G.Nunner-Winkler,Adoleszenzkrise und Identitätsbildung〔Frankfurt/Main 1975〕S.75）また彼らの調査研究から判明した、ここで記しておくべき重要な事実は、激しい青年期危機の経験は、道徳意識の脱慣習的構造へと達するために絶対必要な条件とは言えず（S.140）、民主的でリベラルな

両親のいる家庭環境も、それに向けての等価的働きをもっている（S.186）ということである。

(46) Kroger,Ego Identity:An Overview,op.cit.p.9f.
(47) Marcia,Identity in Adolescence,op.cit.p.180f.
(48) cf.Podd,op.cit.p.500